

「④問題解決」「⑤タスク（役割）配分」である。

生徒の感想には「使えないと思っていた道具も見方を変えると役に立つことに気付かされた。発想の転換が大切だと感じた。」「お互いに声を掛け合ったり、大変なことは全員で協力したりすることが大切になってくると実感した。」「各々に得意、不得意があるということを押さえて、何ができるかを考えなくてはいけない。」という意見が見られた。答えのない課題に対して多様な他者と協働しながら目的に応じた答えを見出すというコミュニケーション能力は、災害時だけでなく、日常生活においても大切であるため、今後もこのような力を付ける活動を設定したい。



〈授業の様子〉

(エ) 地域ふれあい学習会

上島町では、平成28年度から旧町村別で地域ふれあい学習会を開催している。本校はそれに先駆けたモデル校として、平成27年度から活動を行ってきた。この学習会は子どもを中心に据え、学校、家庭（保護者）、地域（一般住民、各種団体、行政など）が一体となって、地域の人権課題について学び合う会である。子どもを中心にすることで、保護者や地域の人々の参加が得られるだけでなく、学習会での実際の子どもの言葉を通して、地域の大人たちに、人権のこと、地域のことを考えてほしいという願いからこの学習会が始まった。

今年度は、10月20日に「命の学習～被災地からのメッセージ～」をテーマに行った。前半は、今治市立近見中学校の越智敦子養護教諭を講師に迎え、講演をしていただき、後半は、各班に分かれてグループワークを行った。地域の協力もあり、保護者・一般参加者数は生徒数を上回り、盛大に行われた。



〈講演会の様子〉

越智敦子先生は、2011年の東日本大震災以降、被災地支援事業やボランティア活動で何度も被災地を訪れた。その経験を通して、防災の大切さや命の尊さについて講演する活動を今治市内の小中学校を中心に行っている。今回は、被災地の被害の状況や被災後の学校や教師、生徒たちの様子などについて、約1時間ご講演いただいた。被災地の学校で読み上げられた校長先生の1学期始業式の式辞や生徒の作文は、生徒の心にも深く残った。被災地の生徒や教師の生の声を、先生が体験したことを交えながらお話くださったことで、より実感をもって心に迫り、命の大切さについてより深く考える時間となった。

後半は、中学生、保護者、一般参加者、教員など多様な世代が参加してグループワークが行われた。「地震発生後、津波が予想される中で、近所の一人暮らしのお年寄りの様子を確認しに行くか、行かないか」というテーマで、意見交換を行った。様々な世代の方との意見交換をすることで、多様なものの見方・考え方を知ることができ、有意義なグループ協議になった。



〈グループワークの様子〉

(5) 家庭・地域への発信、連携

ア PTA救命救急法(AED)講習

岩城小学校では5月の参観日に、6年生と保護者を対象にした救命救急講習を行った。AEDは校内に設置してあるものの使った経験がある児童はなく、その取り扱い方をはじめ心臓マッサージや人工呼吸など詳しく実技講習を受けることができた。他学年の保護者の中にも授業参観の合間を見て講習に参加されたり、地域の方の参加もあつたりして、救命法に関しての意識の高さを感じた。



〈パッドを貼る位置の説明を聞く様子〉

イ ホームページ、学校だより等による発信

児童生徒の学校生活の様子をできるだけ分かりやすく発信するため、学校のホームページはほぼ毎日更新している。保護者にとっては、参観日以外の普段の日の児童生徒の様子を知る大きな情報源となっている。また、月1回学校だより(及び学年だより)を発行し、児童・生徒の声や感想などもできるだけ載せるようにしている。今年度は、防災に関する学校での取組や予定について紹介することで、平日にもかかわらず、行事や参観日などに多くの方が参加や参観をしていただくことができた。



〈ホームページと学校だより〉

ウ 上島町防災訓練への参加

5月26日、上島町で一斉に防災訓練が行われた。小・中学生や岩城に住む教職員も参加し、避難場所や地域にどんな方々が住んでいるのかを確認した。

小・中学生には、特別に資料を準備くださっており、参加した小・中学生は、いただいた資料「まさかのときの応急対応、応急処置」に目を通していった。

地域の自主防災活動や組織を知るよい機会となった。

エ 合同防災学習会への参加(老人会との連携)

夏季休業中の8月22日、岩城地区の老人会主催の防災学習会があり、児童生徒へ参加を呼び掛けた。休業中にもかかわらず、小・中学生の参加があり、お年寄りの方々とともに防災について学ぶことができた。児童生徒はもちろん、お年寄りの方々が楽しく学ぶ姿が大変印象的だった。



〈お年寄りと一緒に学ぶ様子〉



〈救命救急法の体験する様子〉

IV 成果と課題

1 研究の成果

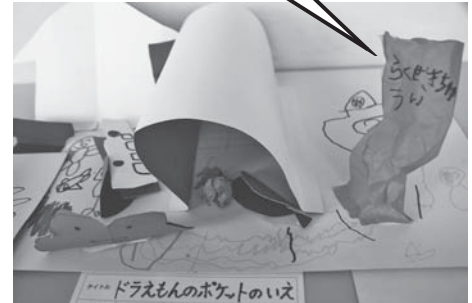
(1) 小学校

- 購入した書籍などを使って地震、津波、火災など、多岐に渡って災害に応じた学習をすることができた。
- 学年や発達に応じて、教材研究と授業実践を行ったことで、防災に対する意識が高まり、知識が増え、実践力が身に付きつつある。
- 危機管理室、愛媛研砂防ボランティア協会等の出前授業を受けることにより、自分たちのくらしや命を守るための自治体の取組についての理解を深めたり、体験を通して災害の怖さを理解したりすることができた。
- 普段あまり目を向けてこなかった防火戸の学習をすることで、自分たちの生活と学校の防災設備について考えるきっかけになった。
- 予告なしの避難訓練を重ねることで、落ち着いて避難できる児童が増えた。
- 岩城中学校の防災学習の授業を小学校の教員が参観することで、中学生の学習の様子を知り、小学校での学習に活かすことができた。
- 学校便りや学級通信、HPで防災の学習の様子を紹介したり、防災の授業や防災学習発表会を公開したり、講演会を開いたりすることで、保護者の防災への関心を高めることができた。
- 防災体験学習に保護者も参加して、起震車、大雨などの体験を児童と共有することで、防災意識の向上に役立った。
- 防災カルテを親子で作成することで、避難場所や緊急時の連絡の取り方等について、親子で話し合うきっかけとなった。
- 非常持ち出し袋を各クラスに一つずつ購入し、参観日に何が入っているか確認したり、どこに置くとよいか、何が足りないかなど話し合ったりすることで、家庭での備えの向上につながった。
- 中学生と合同での避難場所の確認をしたり、中学生が作成した防災マップを説明してもらったりすることで、住んでいる地域の中学生とのつながりが深まり、地域で安全に対する理解が深まった。

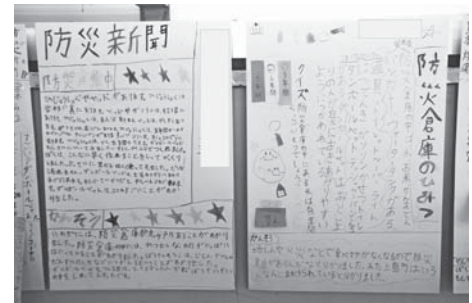
(2) 中学校

- 災害の特性を正しく理解したり、災害情報を適切に活用したりする力を養うための授業として、理科や社会科の教科の特性を生かして授業を行った。授業を通して、適切な行動の基となる知識を育むことができた。

「らくせきちゅうい」と書いている。



〈1年生の作品〉



〈4年生の作品〉

- 教師や大人からの一方的な安全指導ではなく、「何が危険か」「どのように危険か」「どう行動すれば危険を回避できるか」を考える授業として、学級活動や総合的な学習の時間を使って授業を行った。具体的な場面を想定しながら、危険の分析を行い、安全な行動を考えさせることで判断力が養われた。
- 学習した知識や判断力を生かして、避難訓練などで一定の繰り返し訓練をすることによって、思考力・判断力の定着を図ることができた。このような学習活動の積み重ねが、迅速な避難行動につながると考えられる。
- 保護者や地域が一体となつての防災教育の実践に効果があった。防災意識を問うアンケート結果からも、肯定的な回答が増加している。生徒の感想にも「学校で学習したことを家族に伝え、話し合っていきたい」という感想が多数見られた。
- 災害の恐ろしさを実感し、防災における「自助」の意識が高まったのはもちろん、他者を思いやったり、自ら率先して行動したりしようとする「共助」の意識の高まりも見られた。

2 研究の課題

(1) 小学校

- より効果的な指導になるように、学年間のつながりや発達段階を考慮して、系統だった年間計画に改善していく必要がある。
- 災害が起きた時にとるべき行動に関しては学習を重ねてきたが、被災した後の行動にも目を向ける必要がある。
- 今後も校外の研修に教員が参加する機会を増やし、資質の向上を図り、今後起こりうる災害に備える必要がある。
- 児童の防災学習授業や耐震の学習会などに、もっと多くの保護者が参加できるとよかった。
- 児童も教員も、自分の命を守るための行動を理解し、練習を重ねることができつつあるが、自他の命を守る学習は十分ではない。年齢や立場に応じて、自他の命を守るための行動ができるように学習を重ね、実践力を身に付けていく必要がある。
- 中学生との避難訓練が、雨天により、それぞれの地域で行うことができていないので、改めて実施する機会をもつ必要がある。
- 防災カルテを見ると、避難場所が本当にそれでいいのかと疑問に思えるものもあったので、より安全に避難できるように、改良を重ねる必要がある。
- これからも、いろいろな機会をとらえて地域との連携を増やしていく必要がある。

(2) 中学校

- 危険を認知する力は発達段階によって異なり、低学年ほどリスクを適切に判断することが難しい。思考力・判断力を付けるためには、継続的、系統的な指導が必要である。
- 情報のうち何が利用でき、何が利用できないかを判断する力が必要である。情報を正しく理解・分析・整理し、それを自分の言葉で表現したり、判断したりする力を付けるための学習活動を安全教育に結び付けていきたい。
- 安全指導に偏ることなく、安全学習に力を入れていかななくてはならない。
- 防災教育は学校だけでは実践できない。保護者や地域、関係機関と協力しながら、さらに研究を深めていきたい。